「春夏秋冬」

脚本　堀川　炎

M　音楽
D　ダンス（M含める）
S　影絵
SE　効果音

■春

M　春

この世に転がり
息を吸って
わけもわからず
声を上げた
息を吐いたら
スカートをはいて
土のグラウンドを
走り回っていた
タッタッタッタッタッ
転んだら
好きな人ができて
指と指が触れ合った

M　3歳、公園。

「我は大丈夫」、友達になった女の子（幼なじみ）からブローチをもらう。つける。

幼稚園ではお昼の支度。幼稚園の先生（２３歳）は子供たちの世話を焼く。

D　食卓の踊り。

我は大丈夫　我の周りには、個性的な先生がたくさんいました。この人は幼稚園の担任。年少、年中、年長の先生たちです。木村先生、安藤先生・・名前を覚えていない。まだ自我が目覚める前でした・・それでこっちは小学校の担任の先生。小学校１年の伊藤先生。２年のときは青木先生。３年は山野先生。４年、松田先生。松田先生は新任の２３歳。女性の先生。優しい先生。我は先生が大好きでした。風邪をひいて遠足に行けなかった時も、ドングリを採って来てくれました。山、登りたかったな

松田先生　４年生は今日でおしまい。春休みが終わったら、みんなは高学年になります。１年生の面倒をみる年になりますから、少し大人になりますよ。では、元気でね

我は大丈夫　今日つけ、礼

松田先生　さようなら

我は大丈夫　春休みが終わって学校に行くと朝礼で校長先生が言いました。「松田先生は結婚して、他の学校に移りました」３学期にさようならってお別れしたとき、そんなこと言っていなかったのに。ドングリはいつの間にか、虫が湧いていた

母　捨てるわよ

松田先生　さようなら

我は大丈夫　５，６年生は岡先生でした。これで小学校は卒業です。

卒業式の歌。（仰げば尊し）

我は大丈夫　中学１年生、恐い先生が担任になりました。「あっこんにちは」

恐い先生が登場。丸めた紙で頭を叩かれる。

我は大丈夫　柏先生です。体罰は問題にならない時代でした。仲の良かった友達が授業中よく怒られていました。その都度、手が冷たくなりました。その子はよく忘れ物をする子で、同級生たちからも煙たがられていました。だってその子が忘れ物すると、先生がその子の机を蹴って、それで授業が止まるんです。あるとき、その子は帰れと言われ、授業の途中なのに帰ってしまいました。先生は笑っていました。我は、その先生が大嫌いでした

中学２年生の担任舘先生です。３年生の時の永井先生。あっ、この時が一番楽しかったです。卒業式ではこの世の終わりかってくらい泣きました。だって、片思いの同級生とお別れしなきゃいけなかったんだもん

高校１年生遠藤先生、２年、３年生杉本先生。この方は我の卒業と共に定年退職するおじいちゃんの先生でした。本当は、学校からいなくなるとか、いっちゃいけないんですよね。ほら、松田先生の時もそうだった。だけど杉本先生は教室で泣きながら言いました

杉本先生　みなさんが学校に遊びに来ても、もう先生はいません。立派な人になってください

我は大丈夫　壊れそうなくらい泣いていました。でも高校生って不謹慎なところあるから、当時流行っていた使い捨てカメラで、先生のこと撮るんです。その後、みんなで泣きました。

この１０年後、先生は階段から落ちて亡くなります。我は、お葬式の「杉本家葬儀」と書かれた立て看板の写真を、撮りました。なんかその写真２枚並べると、不思議な気持ちになるんです。

杉本先生　立派な人になってください

杉本先生が手を振る。我も手を振る。離れていく、我。

他の先生たちも応援するように手を振る。

風車が風に揺れる。夏がやってくる。

音を聴くと
胸がおどった
綿あめ
金魚すくい
輪投げ
射撃

ドンドンっていう音がすき
だけどいつからだろう
興味のないふりをするようになったのは
今日お祭りよ
お母さんが言う
ふーん
とだけ、我
大人のふりをしたかった
翌年
今日お祭りよ
ふーん
また翌年
来週お祭りだって
へー
また翌年
今年も行かないの
忙しいから
翌年、翌年

そして本当に興味がなくなった

大人のふり、しなければよかったな

D　お祭りの踊り。（おてもやん）

物足りなくなった、幼なじみからもらったブローチを外す。

代わりに花を髪につける。

我は大丈夫、次の時代と交代する。

■夏

M　夏

お酒と煙草
煙をくゆらせながら
我はどこに向かうのか
お酒をもう一口
髪が伸びて
赤い口紅が似合う我　ニッ
鏡を見て笑った
心と体は汗ばむ
後ろにいる人、旦那なり
小さな足がグッとのびて腹をつく
黒に白が混ざるころ

夜店を見ながらチューハイを飲む。タバコを吸う。友人たちと話す。楽しい時間。

２０歳。

我は大丈夫　大学生、少し遠くの大学に行くために、一人暮らしをはじめました。こっちは人がたくさんいて、気おくれします。でも平気。だって幼なじみも一緒だから。一人だと心細かったけど、彼女がいるならへっちゃら。あっこれはサークルの勧誘です。（見渡す）これに決めました。登山サークルです。でも全く山に登りません。

我　あの・・・

仲間　カンパーイ

我　登山は・・・

仲間　カンパーイ

我　・・・カンパーイ！

仲間　カンパーイ！

夏　お酒を飲みながら、煙が一筋たちのぼる

我は大丈夫　サークルの先輩が、我に話しかけてきました。たぶん、好意を持ってくれたんです。一緒にホテルに行って、はじめて外で、知らない人と過ごしました

夏　下に違和感をおぼえた。初めての体験だった。暗い天井をみながら、恐怖を感じた。すこしずつ入ってくるものに、我は自分の中に知らない空間があることに気がついた。それは未知の場所で、我なのに我ではない。宇宙みたいだった。他人の気配が身体に迫ってくる。我はブラックホールに意識をとらわれた。自分の中にある宇宙を知って、我は少しだけ泣いた

S　服を脱いで、ことが終わるとチューハイを一杯飲む。目の前の鏡をのぞく。

夏　だるい身体。乾燥した部屋。空気が動かない部屋。朝焼けがこちらを覗く

我は大丈夫　先輩が起きてきて、煙草を吸いながら大丈夫？とニヤニヤいう。大丈夫じゃねえよ

我とその友人１・２、お茶を飲んでいる。

友人１　え、それでそれで
友人２　それでそれでそれで
我は大丈夫　友人のピーチクとパーチクです
友人１・２　あぁ
友人２　だけどこれでこれで
友人１　あれであれで
友人２　あれでそれでこれで
我は大丈夫　ご覧の通り、よくしゃべります
友人１・２　あぁ
友人１　どれでどれでどれでどれであれでどれで
友人２　それで・・・

M　幼なじみ、話しかける。

我は大丈夫　また今度！

幼なじみ、友達のところへ行く。

我は大丈夫　幼なじみとは、どんどん疎遠になりました。だって彼女が好きなのは、コアなお笑い。我が好きなのは、こんなかんじ（踊る）。その後、あの登山サークルの先輩と、会話することはありませんでした。あ、サークルは飲みサークルとして行ってましたよ

我　「乾杯！」

友人１　それであれでこれで・・・
友人２　どれでこれであれで・・・

友人たち、おしゃべりを続ける。

我は大丈夫　彼氏は3人くらいできました。結構無茶して遊びました。単位はギリギリ取得。はい、これで大学生活はおしまいです。山には、一度も登りませんでした。そして就職

夏　何になりたいか、決める時。これは現実か、今までの夢語りも雲。我は何もつかめていない。

２５歳。

我は大丈夫　この人は入社したときの研修の上司、山根さんです。その後3か月後からの上司、時田さんです。こっちの人は課長、西さん、こっちが部長、山内さん。この人は、3年後に、この人に変わって上司になった長曽我部さん、女性、５５歳。この人が大変だったんです。ああ、やめたい、やめたい、やめたい！そんな時、会社の親睦会がありました。会場は、山の上にあるビアガーデン。だけど行く途中、電車に乗ってたら人身事故。「再開のめどはたっておりません。」えっまじで・・・その時後ろからそろーっと声をかけてきたのが、同じ部署の男性。はいこれ、のちの旦那です。辿りつけないならと途中下車。2人飲み、そのままベッドイン、付き合う、結婚、みごと寿退社です。（上司に）やーいやーい。たまには山に登らないのもありですね。いやたまにっていうか、登ったことないんだけども。ピーチクとパーチクも結婚しました。たまに連絡を取り合います。だけど、疎遠になりました。家庭があるとですね、1年、2年とだんだん間が空きます。幼なじみはどこか遠いところに就職していきました。母親同士つながりがあってなんとなく、知っています

母　まだなんだって、結婚

我は大丈夫　もう、そんなに興味はありませんでした。そして３０歳

３０歳。

Ｓ　女性の影が映る。我は大丈夫、お腹が大きくなる。

夏　赤ん坊が生まれた時、その声は特別だった。どうしてそんなに泣くの？その声は人間ではなく、まだ動物の鳴き声に近かった

我は大丈夫　赤ん坊を見ると、他には何もいらないと思えました

夏　夫が、「がんばったね」と、褒める
我はそれに、笑って答える
産婦人科の廊下は長く感じたけど
帰りになれば、すぐそこが出口
蝉の声が聞こえる
この子と一緒に生まれたのね
バラバラになりかけた身体を引きずりながら
隣を覗くと、抱き方がぎこちない夫
我と夫が笑った
けれどすぐ、夫が指を1本口の前に出し、「しっ」と言う
周りを見渡して気がついた。産婦人科というのは、我のような人だけではなかったのだ

初老の女性が車いすに乗って、前かがみで通りすぎる
髪のない中年の女性が、窓から外を見下ろしている
点滴姿の３０代の女性は、静かに絵本を読んでいる
缶コーヒーを手にソファに座った男性は、何かを待つようにじっとしている
若い男性が年の近い女性の手をきつく撫でた、二人は悲しそうに微笑み合う

考えたら当たり前なのに、自分に精一杯で、分かっていなかった
我たちは、静かに病院を後にした
赤ん坊を抱きながら、彼女らのことを考えた
夫は「暑いね」と、あえて朗らかに高い声をだす
けれど我の耳は、大きく鳴く蝉に傾いていた

３５歳。
我の子供、やってくる。

我は大丈夫　これがうちの子です。娘です。５歳。我がいないと生きていけないんです。

それが愛らしく、生きる活力になっています。「これいる？お母さんがつけていたブローチ」

夏　柔らかい髪よ、温かい肌よ、我はあなたに、どこまでもついて行こう

M　子供と我は大丈夫、共に歩く。

夏　抱っこして、おしめを替えて、ハイハイさせて、お乳をあげて、寝かしつけて。
寒くない？、暑くない？苦しくない？寂しくない？眠くない？お腹すいてない？
つかまり立ちができて、一歩前に歩いて、一言言葉を発して、歩けるようになって、走れるようになって、しゃべれるようになって。たまに転んで、起き上がって、癇癪おこして、泣いたりして。悲しいの？楽しいの？笑いたいの？・・・我にも、こんな季節があったのだ

我　幼稚園の先生です。あれから、３０年が過ぎました

幼稚園の先生（５５歳）が前を通過する。

S　幼稚園の食卓。

４０歳。

我は大丈夫　４０歳、子供は１０歳。少しだけ、手を離せる歳になりました。旦那は単身赴任。少し余裕が出てきたのでパッチワーク教室に通っています

友人１　え、それでそれでそれで
友人２　あれでそれでこれでほんであれでどれで
我は大丈夫　友人のピーチクとパーチク、に似たママ友です
友人２　あれでこれでこれでこれでこれでこれで
友人１　まんで・・・
友人２　これでこれでこれでこれでこれでこれで
我は大丈夫　話が止まらない

友人２　ほんでそれでどれでどれでこれで
友人１　まんで・・・
友人２　あれでこれでそれでそれでこれでほんで
友人１　まんで・・・
友人２　それでこれでほんでほんでほんでどれでこれでこれでどれでどれでほんでそんで
ほんであれでどれでほんで

間。

友人１　これでそれでこれでこれでこれでそれでそれでどれでそれでそれでそれであれであれでこれで
これでそれでそれでそれでどれでどれであれで―

友人１・２、笑う。

我は大丈夫　いま私、少し無理してます

母　ただいま
我は大丈夫　母が帰ってくると、ご近所の噂話をします。あそこのお肉屋さんは株で儲けている。あっちの布団屋さんは遺産相続でもめている。むこうの電気屋さんは店を駐車場にする。それから

母　まだ結婚してないんだって

我は大丈夫　幼なじみの話もしていました。我はふうんと答えました

我は大丈夫、次の時代と交代する。

■秋

M　秋
おーい
はーい
肌に陰り、気にもせず
自称母は結果よいが
自称女はなおのことよし
春夏を歩く我が子は美しい
いきがい
我は今どこ
つまらない人間
あとは死ぬだけの、我
（沈黙）
これでよいのか、我

花を捨て、スカーフを巻く。

５０歳。

我は大丈夫　加齢、体重増加、病気の心配、気の合わない友達とのランチ、近所づきあい、義理の年賀状、義理の中元、義理のお歳暮、悶々とした４０代・・・をちゃぶ台がえし、５０歳になって、全部やめました。無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理。だって今５０歳、世間でいうおばちゃんです。町内会の集まり？めまいがすると言って行きません。少女趣味は、隠しません。おうちにかわいい小物が増えました。キティちゃんのハンカチ使っていても、もう笑ってすましてくれる年齢でしょ。楽、楽、楽・・知らないこと、できないことはさっさとあきらめます。物事を判断することに長けてきました。そしてすべてが断捨離という思想にいきつきます

我は大丈夫　この人はケアセンターの看護師、筒井さん。この人は介護士の今野さん。父を持ち上げてくれる力持ち。でもそのうち、やめてしまいました。次の介護士、山村さん。この人もやめちゃいました。最後の介護士、金沢さん。腰が痛そうでしたけど、よく介護してくれました。ありがとう

泣く母（８０）。

我は大丈夫　そうして父がくも膜下出血で亡くなりました

子供、寄りそう。そのうち子供は大きくなりいなくなる。

我は大丈夫　今度は娘が家を出ました。夫はまだ単身赴任。

秋　冬の母が炬燵に入って寝ている。がらんとした家。だけど我は大丈夫

我は大丈夫　娘の部屋が空いたので、これを機会にいつもの断捨離します

段ボールに物が詰まっている

我は大丈夫　アルバム、アルバム、ぬいぐるみ、人形・・・なかなか捨てられないんですよ

幼い頃にもらったブローチが出てくる。

我は大丈夫　あれ、これって誰からもらったものだっけ

寝ていたお母さんが答える。

我は大丈夫　ああ・・幼なじみからもらったブローチでした

公園がよみがえる。

我は大丈夫　彼女は幼なじみで、大学も一緒。大学で友達が別々になって２度と会うことはありませんでした

ＳＥ　ピンポーン

我は大丈夫　ではなく、最近家に遊びに来ます。よく銀座にも遊びに行きます。フラメンコクラブにも行きました

母　まだ結婚していないの

我は大丈夫　彼女が結婚しない理由を、我は聞かないし、よく分かりません。それでいいんだと思います

ＳＥ　ピンポーン

我は大丈夫　あ、これは旦那です。いつの間にか、単身赴任から帰ってきてました。つまり、これからは死ぬまでずっとこの家にいます。お昼、旦那が会社に行くと、我と母と幼なじみでよくおしゃべりしました。「（夫に）いってらっしゃい！」そして昔ばなしに花を咲かせました。それではどうぞ

子供時代からの写真を眺める。家の中が動く。

M　春
桜
山吹
紅
水
ボタン
若草
すみれ
つつじ
桃
たまご
若竹
鶯
菜の花
紅梅
タンポポ
紅藤
珊瑚
菖蒲

夏
空
向日葵
夏虫
杜若
朱

浅葱
柳煤竹（やなぎすすたけ）
瑠璃
露草
藤黄
からくれない
青竹
緑青（ろくしょう）
若紫
抹茶
百緑（びゃくろく）
藍

秋
渋柿
茜
黄金（こがね）
鈍（にび）
赤朽葉
黄朽葉
中紅花（なかのくれない）
落栗
枯草
胡桃（くるみ）
鬱金（うこん）
銀鼠（ぎんねず）
女郎花（おみなえし）
竜胆（りんどう）
真珠

江戸紫

秋　春と夏を足したら、秋です
夏と秋を足したら、冬です
では、秋と冬を足したら、何になるでしょう

我は大丈夫　この１２年後、母は亡くなります。９２歳、大往生でした

６０歳。

秋　秋と冬を足したら、何になるでしょう
答えは向こうで見つけるでしょう

我は大丈夫　楽しかったね

幼稚園の先生（８５歳）が遠くを歩いている。孫がやってきて一緒に歩く。
我と幼なじみは、それを遠くから見ている。

秋　そして冬　胡粉の季節

我は大丈夫、次の時代と交代する。
スカーフを落とし、杖をつく。

■冬

８０歳。

我は大丈夫　我は８０歳になりました。更年期も終わりました。自分ではそんなつもりはありませんが、口うるさくなったといわれます。すぐカッとします。たまに来る娘にも、この間注意されました。病気は今のところありませんが、数年前に胃潰瘍の手術をしました。この歳になったら、みんながやさしくしてくれるようになります。電車に乗って立っているとすぐ席をゆずってくれるので、弱弱しく「ありがとう」と言ってみます。人が誰でも痛みを抱えていることに気がつきました。そして全てが無に帰ることを、何かの本で読みました。死ぬことも怖くありません。だって眠るようなものだから。年を取ると近所づきあいも減ってきます。そんな中でも新しくできたお友達がこちら。この人は近所の八百屋の遠野さん、この人はそのお隣の美容院、加藤さん。この人は家向かいに引っ越してきた網代（あじろ）さんと、その息子さん。あとペットの犬です。網代さんは息子の結婚と、犬の散歩の話題ばかりで、この人の話を、我はほとんど聞いていません。態度にも出てしまいます。でも仲がいいときもあります。残り短い人生ですから、自分を偽ったところでいいことなんかないんです。そんな、自分に正直に生きる人たちばかりです。だから体は動きませんが、楽に生きています。

ある昼下がり、八百屋と美容院、網代さん３人でお茶を飲んでいるときです。温泉旅行に行こうという話になりました

八百屋　いいわねいいわね

美容院　ほほほ、いいわね

網代　じゃあ朝の７時に、駅に集合ね

我は大丈夫　網代さん以外はひとりで生活しています。（美容院）離婚、（我）未亡人、（八百屋）旦那の家出。一泊二日の温泉旅行は気兼ねなくいけます。ところが当日

八百屋　腰が痛くて

美容院　親戚の不幸が

網代　孫がどうしても今日っていうからさ

我は大丈夫、イライラする。

我は大丈夫　みんな自分に正直です。というわけで一人旅行となりました。４人中３人も減るなら、キャンセルしてもいいんですよ。けれどもったいないし、気になることがあったんです

到着。

我は大丈夫　はい、ここが温泉街です。あれが泊る民宿です。これが４人部屋です。１人なので、広いです。こちらは気のいいおかみさん、にぎやかな子連れ客、少々熱い温泉、今猿が通り過ぎました。（餌を投げる）ああ、あそこに見えるのが山です。そう・・・山・・・

我、部屋から山を眺める。

我は大丈夫　山・・山・・山・・・・・・

おかみさん　失礼します。

我は大丈夫　おかみさんが入ってきました。「あれはなんていう山ですか」

おかみさん　ああ、あれは富士山です

我は大丈夫　ふじさん？

おかみさん　別名、不死身の不に、死ぬの死、そして山。「不死の山」とも呼ばれていたんです

我は大丈夫　恐ろしい呼び名ですね

おかみさん　いえ、そんなことないですよ。というのもね、大昔に当時の帝があの山の頂上で、不老不死の薬を焼いたっていうんです。それで不死の山、富士山です

我は大丈夫　どうして焼いてしまったんでしょう

おかみさん　その薬は帝が恋焦がれた女性がくれたものだったのですが、当の彼女はその

薬を渡すと月へ帰ってしまったとか。それで好きな人がいないなら、生きながらえても仕方がないと考えたようです。
我は大丈夫　焼いてしまったからあの山は剥げているんですか
おかみさん　昔は雪が積もっていたんです。その名残で木が生えないのです。だからはげ山に見えるのでしょう

間。

我は大丈夫　ところで、何しに来たんですか
おかみさん　失礼しました。はい、お夕食です
我は大丈夫　あ、どうも
おかみさん　ごゆっくり
我は大丈夫　あの

おかみさんが振り返る。

我は大丈夫　あの山には登れるんでしょうか
おかみさん　登れますよ、夏には
我は大丈夫　今はいつでしたっけ
おかみさん　冬です

間。

おかみさん　では失礼します

おかみさん、出ていく。

我は大丈夫　山・・・山・・・山・・・我の記憶では、山に登ったことはありません。それは幼少の時に、山に登る遠足の日に、風邪で行かなかったところから始まります。その後もことごとくタイミングを逃し、ようやく入った大学の登山サークルでもたしか登りま

せんでした。あのサークル、なんだったんでしょう。そして夫とも、山に登れなかった結果、結婚しました。その後もことごとくタイミングを逃し、今回だってハイキングしようなんていう話もあったんです。それなのに全員キャンセル。これは何か因果なのでしょうか。山の神様から来るなと言われている、そんな気がしてなりません。山・・・山・・・山・・・

我、山の形を指でなぞる。

我は大丈夫　お気づきですか、そう今こそ山に登るんです。次の朝

山が現れる。我、山に登る準備。

我は大丈夫　晴天なり。しかし人は誰もいない

高い　１４５０

我は大丈夫　ここが入口

我、山に登る。しばらくして転ぶ。杖が遠くまで転がる。猿、出てくる。

我は大丈夫　猿です

猿、杖を拾って我に返す。そしていなくなる。我、山を見上げる。

Ｄ　山の踊り

途中何度か登れないが、誰かが助けてくれる。

高い　１５１６

我は大丈夫　一合目

高い　１７１０

我は大丈夫　二合目

４羽の白い鳥たちが空をジャンプする。

高い　１８４０
我は大丈夫　三合目

リスがタンゴのリズムを刻んでいる。

高い　２０１０
我は大丈夫　四合目

赤い植物が口をひらき、我を飲み込もうとする。
トカゲの顔をした蛇は、笑って脇をすり抜ける。

高い　２２００
我は大丈夫　五合目

４羽の白い鳥がまた通り過ぎる。我を凝視している１羽に気がつく。
亡くなった母だった。

高い　２３９０
我は大丈夫　六合目

風車を回した子供たちが、幼なじみからもらった春のブローチと、
髪につけていた夏の花、秋のストールを持って風のごとく通り過ぎる。

高い　２７００
我は大丈夫　七合目

これまで出会った人々は、我にやさしく話しかける。

高い　３０２０
我は大丈夫　八合目

満月が出ている。そのまま海に落ち、深い底まで落ちていく。
小さな魚たちは、我にまとわりつき、やさしくいたわる。

高い　３６００
我は大丈夫　九合目

我は浮上し逃げる。魚に爪が生えて狂暴においかける。

高い　３７７６
我は大丈夫　頂上

我、頂上に到着。雪が降っている。

我は大丈夫　あたりは暗く、星が瞬く

人々が立っている。

我は大丈夫　助けてくれて、ありがとう

人々はいなくなる。

我は大丈夫　目の前、よりだいぶ遠い眼下で、地上の光がまぶしく光る

後ろからミニセグウェイに乗った人物がやってくる。我、振り返る。

セグウェイ　・・・・

我は大丈夫　誰

セグウェイ　・・・・

我は大丈夫　天使？

セグウェイ、うなづく。

我は大丈夫　でも天使なら、飛べそうなものなのに、あなたは地面に足をつけないと歩けないじゃない

セグウェイ、何も言わない。

我は大丈夫　矛盾だらけね

我、歩き始める。

我は大丈夫　我は、頂上の縁を歩き始めました

セグウェイ、ついてくる。

我は大丈夫　楽そうね、それ

セグウェイ、セグウェイから降りる。

我は大丈夫　いいわよ

セグウェイ、セグウェイに乗り、また二人は歩き続ける。

我は大丈夫　星が瞬く。我は地面に突っ伏した。その１５時間後に発見され、２４時間後に我のもとに近所の人たちや友人、幼なじみが来た

近所の人たち、我を見て悲しむといなくなる。
春からの幼なじみ、一人残り、我の頭を長い間なでる。
幼なじみ、我にキスをする。

M　冬

テレビを見ていると電話
友達は多いほう
もらった甘いみかん
旦那に供えた
さみしさは不思議なほど、ない
体もまぁ丈夫
しかし娘に平気か聞かれる
我は大丈夫
ふと木枯らしをみて我かと笑う
寒い夜空
星は変わらない
あれ、背中、少し曲がったかしら
生まれるときも死ぬときも
人はひとり
だから我は大丈夫

粉雪が舞う
我は大丈夫
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
我は大丈夫
粉雪が舞う
粉雪が舞う
我は大丈夫
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う

我は大丈夫
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
我は大丈夫
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
我は大丈夫
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
我は大丈夫
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う
粉雪が舞う

粉雪が舞う
粉雪が舞う

（終わり）

＊上演ご希望の方は、こちらまでお問い合わせください。

一般社団法人 tokyo sisters
連絡先　info@setagaya-silk.com